

HIL

American ROCK LYRIC LANDSCAPE

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介



第21回

ラヴィン・スプーンフル 「ヤンガー・ジェネレーション」

60年代アメリカの世代間格差を歌う



The Lovin' Spoonful
"Everything Playing"
Kama Sutra OKLPS8061 [1968]
Edsel [UK] ©EDSS1049

1969年の夏、当時中学生だった俺は、ロサンゼルスに住んでいた。2年間暮らしたテキサスから韓国に引越す途中、~~俺~~ ^俺は韓国の首都を半ば夜中の夜、ラッキーマン(?)などに、韓国に住む予定のアパートが完成しなくて、2週間のはずだったLAでの滞在が3か月に伸びてしまっただけ。学校も始まってしまおうのに。とはいえ俺にとっては、生まれて初めてサーフィンをするなど、さまざまな西海岸の経験ができた。夏だった。その夏のアメリカは色々な出来事があった、とてもイキイキしていたんだ。

姉のパメラが絶対見なければと連れていってくれたのが、その前年に公開された映画、スタンリー・キューブリックの「2001年宇宙の旅」。全然わからなかった。特にサイケデリックな映像部分が(笑)。そ

いつどうアクシデントがあったからか。

TL

国で見た。ウッドストックの映画もね。ちなみにこの69年には、「イージー・ライダー」も「Hell's Angels '69」(大暴走・地獄のライダー)も上映されていた。すごい時代だったよね。

そのウッドストックの映画には、サンタナ、テン・イヤーズ・アフター、ジミ・ヘンドリクスなど印象的な映像がいくつもあつたが、俺はアコギ一本で歌ったカントリー・ジョー・マクドナルドと、ジョン・セバスチャンを一番よく覚えている。

ジョン・セバスチャンは雨でステージが濡れていたため、エレキ・バンドが演奏するのは危ないからとアコギ一本で歌うことになった。ジョンはレクリエーション・ドラッグを使って歌っていたから、途中で歌詞を忘れてしまった。観客と一緒に歌ってくれて、こたなきを得たというエピソードもあつた。もちろん中学生だった俺には、F・U・C・K.を連呼させたカントリー・ジョーもすじがかったけど。

では、曲に入ろう。この「ヤンガー・ジェネレーション」は、もともとジョン・セバスチャンがメインのソングライターでリード・ヴォーカルでもあつたバンド・ラヴ

イン・スプーンフルが68年にリリースした4枚目のアルバム「エヴリシング・プレイング」に収録されていた。

なお、ウッドストックでジョンが「ヤンガー・ジェネレーション」を歌ったその模様は、DVD『ディレクターズ・カット・ウッドストック 愛と平和と音楽の3日間』40周年アルティメット・コレクターズ・エディション(ワーナー・ホーム・ビデオ)で見ることが出来る。

Why must every generation
Think their folks are square?
And no matter where their heads are
They know moms ain't there
Cause I swore when I was small
That I'd remember when
I knew what's wrong with them
That I was smaller than

この曲は、60年代後半によく話題になっていたジェネレーション・ギャップがテーマの歌だ。なぜいっつも新しい世代は、親(folks)のことを時代遅れだと思っただろう。squareは直訳すれば、四角い。

アメリカ人はいっつも
コンプレックスをさめようか、んんん

れから同じく68年の「猿の惑星」、こちらのほうが、まだわかりやすかった。

それからほどなくして、アポロ11号が月に着陸した。外で遊んでいた俺と友達に親に呼ばれて、テレビでその映像を見せられたんだ。正直言って、既に「2001年宇宙の旅」を見ていた俺は、あまり感動しなかった。それより、その当時テレビでよく流れていた別の映画の予告編の方が面白かった。その予告編は、アロー・ガスリーのヒッピー映画「アリスのレストラン」のものでした。

そしてその69年の夏、もうひとつ印象に残ったのは、ニューヨークの郊外で行なわれたウッドストック・ミュージック&アート・フェスティバル。8月15、16、17日の開催だ。

もちろん若造の俺は行くことができなかった。しかも終わった後にニュースで初めて知ったんだ。でも、テレビで流れていたニュースは衝撃的だった。映画「アリスのレストラン」は8月19日に公開され、そのアロー・ガスリーがウッドストックに出演したのが15日。残念ながらこの映画はその夏には見ることができなくて、次の年に韓

だが、頑固な人、古くさい人、という意味で、~~俺~~ ^俺は偉い。そして、新しい世代が何かに夢中になつても、その母親にはまったくそれが理解できないという。'where their heads are' は、頭はそこにいない、つまりわかっていないという意味だ。でも俺は小さいころに誓った、親たちのどこに問題があつたのかを忘れずにいようと。自分には問題がなくて、親と親のジェネレーションに問題があつた。だけど、俺は今よりは小さかった。もしかしたら問題は自分が持つていたかもねと開き直ってる。

Determined to remember all the
cardinal rules
Like sun showers are legal grounds
for cutting school
I know I have forgotten maybe one of
two
And I hope that I recall them all
Before the baby's due
And I know he'll have a question or
two

。基本的なルールを忘れずにいようと決心した。"Cardinal rule" は一番ベイシツクで大切なルールのこと。友達と彼女とデートしてはいけない、人を殺してはいけない、といったものだが、ここでのジョンは幼少時ならはの大切なルールを思い出している。例えば子供の。法律。では、天気雨なら学校をさぼっていい、そんな子供の頃の。法律。のうち一つか二つはもう忘れてしまったけれど、自分に赤ちゃんができるころまでには、全部を思い出したいという。まじと生まれた子供もいくつか質問をしてくるだろうしね。ちなみに、"cutting school"とは、学校をさぼるという意味だ。

Like hey pop
Can I go ride my zoom?
It goes two hundred miles an hour
Suspended on the balloons
And can I put a droplet of this new
stuff on my tongue
And imagine frothing dragons
While you sit and wreck your lungs
And I must be permissive under-



standing of the younger generation

例えば、こんな質問だ。"ねえお父さん、僕の。ズーム。に乗りに行つていいかな？ 風船にぶら下がって速度200マイルで飛ぶんだよ。zoom" は子供がよく使う擬音語で、おもちゃの飛行機や車が速く走るときに使う表現だ。この新しい薬を一滴舌に垂らしてみてもいいかな。そして僕はお父さんがタバコで肺をダメにしている間、泡を吹く龍を想像するんだ。

60年代はいろんなドラッグを試す時代だったから、もし自分の子供たちも同じような道を歩いたらどうしようかと悩んでいる。そして "And I must be" 以下で、僕は若い世代に対してびい心でわかってあげなきゃいけない。と自分に言いかけさせているんだ。

And then I know that all I've learned
my kid assumes
And all my deepest worries must be
his cartoons
And still I'll try to tell him all the
things I've done

Relating to what he can do when he
becomes a man
And still he'll stick his fingers in the
fan

。そして気がつけば、僕が今まで学んだことを、僕の子供は当然のことだと思ってる。自分たちが経験で学んだことは、次の世代にとっては当たり前前のことになってしまっている。僕の深い悩みは、彼に託してはまるで漫画だ。それでも僕は彼が大人になった時、今まで僕がやってきたことを教えてあげたい。大人になってから彼が何をやるのかに聞わって話だから。でも実際にはわかってくれないよね、という心境を、その後の。それでも彼は扇風機に指を突っ込んでみたりしてしまおうのだから。という歌詞で表わしている。

And hey pop
My girlfriend's only three
She's got her own video phone
And she's taking LSD
And now that we're best friends
She wants to give a bit to me

And what's the matter daddy?
How come you're turning green?
Can it be that you can't live up to
your dreams?

そして、ねえ、お父さん。僕（息子のこと）の彼女はまた3歳だけど、彼女は自分のビデオ電話を持っているしLSDだつてキメているんだ。僕たちは仲がよくて、僕に少しLSDをくるといふんだ。これは、ピア・ブレッシャー（仲間からの圧力）のことを歌っている。友達からの影響ってあるからね。でもお父さん、どうしたの？ お父さんの顔はなぜ緑になってきているの？ 自分の夢に素直に生きていてはいけないの？。顔が緑になるという英語は、日本語で顔が青くなるという表現と同じ意味だ。

ウッドストック・フェスに影響された人たちは、今ではもう50代から70代になっているだろう。子供を産んで育てた人もたくさんいると思う。この曲に出てくるように、きつと悩んだらう。ドラッグに



ジョージ・カックル / GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。
1956年、鎌倉生まれ。
18歳で新宿2丁目のロック・バー<開拓地>で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イヴェントなどのMCでも活躍。
http://whatsupmusic.inc.com